

『逆修説法』の概要 (2)

齋 藤 蒙 光

【抄録】

『逆修説法』は、中原師秀の逆修法要における法然の説法の記録であり、建久五年（1194）頃の成立と推測される。全六回の説法はそれぞれ、阿弥陀仏の仏身や名号、光明、寿命、依正二報などの諸々の功德を説明する「仏徳讃嘆」と、浄土三部経の要点を挙げながら善導、法然の念仏思想を説き示す「経徳讃嘆」との二部構成となっており、特に後者では同じ話題が繰り返される。また大部の資料であるため、何処に何が説かれているのか、内容を把握し難い。拙稿は、その手助けとなるよう、『逆修説法』の科文、要旨、頁数を列記したものである。当初、個人的資料として作成したが、『逆修説法』研究班の成果や、当センター諸研究員の手による資料を活用させていただき、さらに内容を充実させることができた。

キーワード：法然、逆修説法、阿弥陀仏、念仏、往生

本稿は「逆修説法の概要 (1)」と同じく、基本的に善照寺本『漢語灯録』所収の「逆修説法」を底本とし、四七日から六七日までを取り上げた。各項目の後に適宜 () に囲み、以下の八種の資料の頁数を適宜記入した。

① 法然院本『師秀説草』

(藤堂恭俊博士古希記念会『浄土宗典籍研究』資料編、同朋舎出版、1988年)

② 専修寺本『西方指南抄』所収「法然聖人御説法事」

(法然上人研究会『法然上人研究』2号、1993年)

③ 安土浄厳院本『無縁集』(宇高良哲編著『『逆修説法』諸本の研究』文化書院、1988年)

④ 安土浄厳院本『漢語灯録』所収「逆修説法」(四七日以降は現存せず)

⑤ 大谷大学恵空本、義山開版本『漢語灯録』所収「逆修説法」(『『逆修説法』諸本の研究』)

⑥ 千葉善照寺本『漢語灯録』所収「逆修説法」

(浄土宗総合研究所編『黒谷上人語燈録写本集成』1、浄土宗、2011年)

⑦ 『昭和新修法然上人全集』所収「十三、逆修説法」(善照寺本を底本とする)

⑧ 伊藤唯真監修、真柄和人訳注『傍訳逆修説法』下巻、四季社、2006年

四七日 阿彌陀仏、『観無量寿経』

○**仏徳讃嘆** 惣別二種の功徳について (①77、②一、③153、⑤319、⑥217、⑦255、⑧17)
仏には惣(総合)・別(個別)という二種類の功徳がある。

1. 惣の功徳…四智・三身など。

(1) 三身

内証の功徳は諸仏共通のため、説明を省くことが多いが、ここでは三身を形式的に説く。

① 法身…無相甚深の理、一切諸法はつまるところ空寂であるという真理。

② 報身…無相の妙理をさとる智慧。

所知の法身と能知の報身は一体であり、その功徳は法界に行き渡っている。

③ 応身…衆生済度のため、無際限の中に際限を示し、無功用の中に功用を現わす。

(2) 仏の功徳は計り難い

① 応持菩薩は、竹の杖を継ぎ合わせて釈尊の身長を測ろうとしたが断念した。

② 目連は、釈尊の声が届く範囲を測ろうと光明幡世界まで行き、自力で戻れなくなった。

2. 阿彌陀仏の別徳 (①78、②一、③155、⑤325、⑥220、⑦256、⑧28)

(1) 白毫

阿彌陀仏には八万四千の相があるが、その中でも白毫が最も勝れている。

『観経』「但、眉間の白毫を観じて、極めて明了ならしめよ。」

善導『観念法門』「心を眉間の白毫に注めて、雑乱することなかれ。」

よって、しばらくは源信『阿彌陀白毫観』に基づき、白毫一相の功徳を讃嘆する。

① 白毫の業因

『大集経』「他の徳を隠さずして、其の功徳を称揚するの功徳に由りて、白毫の相を得。」

『戒経』「不妄語の功徳、白毫と成る。」

『観仏三昧経』「六度万行、大慈大悲の諸の功徳を勤修して、此の白毫を得。」

法蔵菩薩は永い間、六波羅蜜や四摂事などを修した功徳を、眉間に集めて白毫を顕した。

② 白毫の相貌

A 姿形の譬え

『観経』「眉間白毫、右旋婉轉、如五須弥山。」

『観仏三昧経』「旋轉して頗梨珠の如し。」

『大般若経』「軟なること都羅綿の如し。白きこと珂雪の如し。」

これらのように白毫の様相は、譬えを用いないと表現するのが難しい。

龍樹も、仏を讃嘆する際に「面善円浄如満月」と、その顔立ちを満月に譬えている。

B 光明

白毫一相の中に八万四千の相好があり、一々の好に八万四千の光明がある。

よって白毫一相より放つ光明は「七百五俱胝六百万」になると、源信が計算している。

③ 白毫の作用

白毫より放つ光明の中に衆事を現わす。源信によると、現われる境界は十法界を出ない。

また仏身をもって導くべき者があれば、その白毫の光を現して仏身とする。

その仏身に二種ある。

A 始終応同の身…釈迦のように八相成道を現わす。

B 無而歎有の身…忽然と仏身を現わす。

a 菩薩の身…観音や勢至、地藏などの大菩薩も、弥陀の白毫が現わしたのである。

b 辟支仏の身…前仏の法が滅し、後仏が出現していない時代には、独覚として現れる。

c 声聞の身…舍利弗などの仏弟子も、阿弥陀仏が釈迦を補佐するために現わしたのか。

d その他、天・人・地獄・畜生・餓鬼などを現わす。

六道四生、一切の凡聖は、阿弥陀仏の百毫の光の現わす所かと疑われる。

また白毫のみならず、八万四千の相も同じように、一切の身を現わす。

よって法界の内には、ただ弥陀一仏が遍く行き渡っている。

④ 体性

『中論』「因縁所生法、我說即是空、亦名為假名、亦是中道義」

白毫是因縁所生の法であるため、即空・即仮・即中である。

A 即空…因でも果でもなく、つまるところ空寂であり、体も用も無い。

B 即仮…因果、体用、万徳に限りがなく、三世の法門や一切の諸法を悉く具足している。

よって、仏や菩薩、六道など、すべてが阿弥陀仏の白毫の一相に具わっている。

C 中道…有るでもなく無いでもなく、具えるでもなく具えないでもない。

因果を離れ、また因果を離れるでもない。体も用も無く、体用が無いでもない。

例えると、如意珠のようである。

白毫相以外の阿弥陀仏の諸相や、諸仏や菩薩、二乗や六趣四生も、みな三諦を具える。

この三諦の理においては、凡と聖、迷と悟が互いに具え合う。

よって地獄の依正は仏の心中にあり、仏の身土は凡夫の一念を越え出ない。

これは天台宗の教えである。

⑤ 利益

『観仏三昧経』「此の相を観る者は、九十六億那由他恒河沙微塵数劫の生死の罪を除却す。」

三諦を觀じずとも、白毫相だけを觀じれば、多劫の罪を滅する。

あるいは、白糸を連ねて巻いたのを見るだけでも、悪業や罪を滅する。

(2) 人との比較 (①79、②一、③155、⑤332、⑥226、⑦258、⑧52)

仏は螺髪と白毫の二相により、人より勝れていることを顯す。

ただし人間の中にも、肉髻を得る者がいる。

① 南岳大師は、法華三昧の最中に普賢菩薩に頭を撫でられ、肉髻が生じた。

② 遵式は、般舟三昧の最中に観音菩薩に病を癒され、肉髻が生じた。

これらは特別な例であり、よくあることではない。

この他に、人も仏も同じく六根を具すが、そこには勝劣、好醜という相違もある。

(3) 釈尊との比較

釈尊は『法華経』を説く際に、三千大千世界すべての菩薩たちの頭を三度も撫でたという。丈六の釈尊ですら、このように不思議な力用を持つ。まして阿弥陀仏は言うまでもない。

○経徳讃嘆、『観経』②

(『選択集』十二章と相似、①80、②一、③157、⑤334、335、⑥228、⑦258、⑧67)

この経には定散二善（三福九品の散善、十三の定善）を説いて往生の行業を明かす。

1. 三福

(1) 孝養父母など（世福）

①孝養父母

A 世間の孝養…『孝経』に説かれている。

a 父母より授かった身体を大切にす

「身体髪膚は父母に受けたり、敢えて毀い傷らざるを孝の始めとするなり」

この文に二義ある。

・両親と同じ人間の身体をもって生まれることで、安心させる。

・自分の身体は両親の身体の一部でもあるのだから、傷つけないよう心掛ける。

これを「孝養の始まり」とする。

b 身を立て道を行う

家業に励んで名を上げることで、「あれは誰々の子だ」と、父母をも有名にする。

これを「孝養の終り」とする。

c 五等の孝養…天子・諸侯卿・大夫・士・庶人それぞれの孝養。

d 水菽の孝養…薪を採り、水を汲み、菜を摘み、果実を拾い、朝夕に両親を養う。

e 顔色の孝養…両親の顔色を窺い、その心に逆らわない。『論語』に説かれる。

B 出世間の孝養

a 仏道修行に励む

「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者。」

世間の孝養を捨て、山林や寺院で仏道を修行する。

しばし有漏の恩徳を忘れても、最終的に無為の報謝を求めるのを真実の孝養とする。

『心地観経』「父母に代わりて誓願を発して阿蘭若菩提場に入りて…妙道を修すべし。」

b 出世間において「身を立て道を行う」義

智行が内に積もり、名徳が外に顕れて、三蔵や禪師、律師、大師などと尊称される。

c 必ずしも父母を捨てる必要はない

律の中には「生縁奉事」の法があり、「貧しい父母を寺の内外で養え」と説かれている。

『梵網経』「父母、師僧に孝順するを戒と名づく」

d 父母の善知識となる

須跋陀は永く仏教に帰依しなかったが、過去世で親子関係にあった阿難に従った。

親子は宿縁が深いため、教化に随い易い。

施主の大法主禪門が孝子大徳によって往生浄土門に入ったことも、趣き深く思われる。

② 奉事師長 (①82、②一、③159、⑤339、⑥232、⑦259、⑧81)

A 世間の師

仁義礼智信や記伝・明経・医道・陰陽道などを教える師に孝順給仕する。

世間では、父・師・君に対して、同等に仕えねばならないと言われている。

B 出世の師

各宗の出離生死・成仏得脱を教える師僧の恩は、父母の恩にも勝る。

道宣律師「父母は七生、師僧は累劫、愚者は知ること無し」

沙弥道衍や均提沙弥は、師に仕えるために敢えて具足戒を受けなかった。

③ 慈心不殺 (①83、②一、③159、⑤341、⑥223、⑦260、⑧86)

四無量心の中の「慈無量」。初めの一戒を挙げて、後の三つを摂する。

A 慈無量…楽を与える。

B 悲無量…苦を助ける。

C 喜無量…抜苦与楽を見て喜ぶ。

D 捨無量…喜ばず憂えない。

④ 十善業

不殺生・不偷盗・不邪淫・不妄語・不綺語・不悪口・不両舌・不貪・不瞋・不邪見である。

天台の解釈には四教の四無量・十善業があり、真言には五種の四無量・十善業がある。

行じる事柄は同じだが、観心の浅深により相違が生じる。

(2) 受持三帰など(戒福) (①83、②一、③161、⑤342、⑥234、⑦260、⑧88)

① 受持三帰

仏法僧に帰依する。翻邪の三帰、八戒の三帰から声聞戒の三帰、菩薩戒の三帰など多数ある。

大きく分ければ二種となる。

A 大乘の三帰

B 小乗の三帰

② 具足衆戒

天台では二種の具足戒がある。

A 大乘の具足戒…『梵網經』により、五十八戒を持つ。

B 小乗の具足戒…『四分律』など小乗律により、比丘は二五〇戒、比丘尼は五百戒を持つ。

③ 不犯威儀

A 大乘の威儀…八万の威儀

B 小乗の威儀…三千の威儀

(3) 発菩提心など（行福）(①84、②一、③161、⑤343、⑥235、⑦260、⑧91)

① 発菩提心

諸師や諸宗により解釈が異なる。

A 天台…四教（藏・通・別・円）の菩提心。詳しくは『摩訶止観』に説かれる。

ただし、藏・通の菩提心は往生できない。

B 真言…三種（願行・勝義・三摩地）の菩提心。詳しくは『菩提心論』に説かれる。

C 華嚴の菩提心…『菩提心義』や『遊心安楽道』に説かれる。

D 善導が釈する菩提心…詳しくは『観經疏』に述べている。

② 深信因果

A 世間の因果…六道の因果。『正法念処經』に説かれる。

B 出世の因果…四聖の因果。諸々の大小乗經に説かれる。

この因果の二法により、すべての諸經を摂することができる。

諸宗で解釈が異なるが、ここでは天台の解釈を挙げる。

a 『華嚴經』…仏・菩薩の二種の因果

b 『阿含經』…声聞・縁覺の二乗の因果

c 諸の方等の諸經…四乗の因果

d 般若の諸經…四教の内の通・別・円の因果

e 『法華經』…仏の因果

f 『涅槃經』…四乗の因果

二種の因果を信じる者は、他に行がなくとも往生できる。

二種の因果を疑う者は、往生できないのみならず、悪道に墮ちるであろう。

新羅の順璟法師は、『華嚴經』經を誹謗した途端に、大地が裂けて地獄に墮ちたという。

③ 読誦大乘

A 「大乘」の説明

広く大乘の經・律・論、顯教・密教を受持・読誦すれば、みな往生の業となる。

B 「読誦」の説明

詳しく言うと、受持・読誦・解説・書写などである。

『法華經』の五法師で言えば、受持・解説・書写を略し、転読・諷誦を挙げている。

十法師で言えば、披読・諷誦の二法師のみを挙げている。

④ 勸進行者

道綽によると、二種に分けられる。

A 聖道の行者…八宗の行者。

B 浄土の行者…専ら往生を求める輩。

二門の行者について勸進するのは、往生の業となる。

この「勸進行者」の一句にも、すべての仏教から諸宗の法門までを悉く摂する。

(4) 浄土宗における一切経の位置づけ

浄土宗においても一切経は大切である。

なぜなら、三福業の具体的な行相は、他の諸経によって明らかとなるからである。

よって浄土宗の中にも、大小乗の諸経が悉く含まれるはずである。

まして「勸進行者」の、経典を解説する師であれば、とりわけ諸宗を兼学すべきである。

2. 十三定善・九品…時間が遅くなったので省略する。

五七日 阿弥陀仏、『双卷経』、五祖の影

○仏徳讃嘆、依正二報について (①85、②一、③163、⑤348、349、⑥239、⑦261、⑧121)

1. 依報…宝地・宝樹・宝池・宝殿などの、地上・地下の一切の荘嚴

(1) 宝地

浄土三部経で記述が異なることについて、四種の解釈がある。

① 正しい解釈

「不可説無量」の宝をもって極楽世界の地とする。

② 『無量寿経』の「七宝為地」

衆生に楽欲・欣求の心を発し進ませるため、この世で特に珍重される勝れた七宝を挙げる。

③ 『観経』の「瑠璃為地」

この経は観想を勧めており、地想観の準備段階に水を用いるため、よく似た瑠璃を挙げる。

④ 『阿弥陀経』の「黄金為地」

衆生に欣求の心を勧めるために、七宝の中でも第一・最上の宝である金を挙げる。

(2) 宝樹 (①87、②一、③163、⑤351、⑥240、⑦262、⑧127)

地が素晴らしくとも、木々がなければ荘嚴とは言えない。

この世でも、景勝の地というのは、木々などが申し分のないところを言う。

よって、この世に准じて宝樹の荘嚴を説く。

木々の高さは八千由旬で、一宝のみから成る純樹と、異なる宝が混じり合う雑樹とがある。

(3) 宝池

木々があっても池がなければ、やはり荘嚴とは言えないため、宝池を説く。

内外左右に諸の浴池があり、阿彌陀仏の浴池は八万四千由旬である。

(4) 宝楼

宝殿がなければ、阿彌陀仏や聖衆の居住するところがないので、宮殿を説く。

楼閣は宮殿の飾りであり、その四つの角に必ずある。

(5) まとめ

これらの依報は、みな阿彌陀仏によって成り立つ功德である。

この他に衣服や飲食も、自力ではなく阿彌陀仏の願力により、思いのままに与えられる。

阿彌陀仏の功德は、相好や光明のみならず、国土荘嚴を説くことでも明らかとなる。

2. 正報 (①88、②一、③165、⑤354、⑥242、⑦262、⑧133)

(1) 阿彌陀佛

その身量・眉間の白毫・身色・円光は、『観経』真身觀に説かれる通りである。

八万四千相それぞれに八万四千の好があり、それぞれの好より八万四千の光明を放つ。

一々の光明は遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を攝取して、お捨てにならない。

(2) 観音・勢至および彼の土のあらゆる菩薩・人・天

極樂の住人の頭目・髓腦・五体などは、全て阿彌陀仏の願力による功德である。

譬えると、娑婆世界の人の子の身体は、全て父母が分け与えたものであるようなものだ。

四十八願の中の「五通の願」「悉皆金色の願」「具足諸相の願」などが、その願である。

阿彌陀仏は神通力や金色の肌などをもたらすため、往生人の六根六識の全てにお入りになる。

観音・勢至も娑婆から極樂へと往生し、「一生補處の願」によって補處の菩薩となった。

3. 極樂浄土の一切万物を見聞すれば、念仏の心を生じる

(①90、②一、③167、⑤355、⑥244、⑦263、⑧139)

宝樹・宝池・宝閣から水鳥まで、全てを阿彌陀仏が顕したためである。

『阿彌陀経』「欲令法音宣流、變化所作」

天台宗の解釈「一仏成道、觀見法界、草木国土、悉皆成仏」

依正二報を説くのに『無量寿経』とだけ呼称するのは、それらが阿彌陀仏の願力によるため。

娑婆世界でも、文殊の聖地・五台山の草木や一切万物は全て文殊なのだと思観する。

五台山の無遮大会で、文殊菩薩が貧しい女性となって現れたという因縁話もある。

極樂浄土も同様であり、その依正二報は全て法蔵菩薩の願力に応じて成就したものである。

○五祖 (①91、②75、③169、⑤358、⑥246、⑦263、⑧151)

1. 往生浄土の祖師の五影像を図絵する理由

- (1) 恩徳に報いるため。
- (2) 賢人を見て「同じようになろう」と思うため。

2. 浄土宗の師資相承

- (1) 『安楽集』の六祖…菩提流支・慧寵・道場・曇鸞・齊朝・法上
- (2) 五祖…曇鸞・道綽・善導・懷感・少康

3. 五祖の伝記

- (1) 曇鸞
- (2) 道綽 (①93、②75、③171、⑤360、⑥248、⑦264、⑧158)
- (3) 善導 (①94、②76、③171、⑤361、⑥249、⑦264、⑧163)
- (4) 懷感 (①95、②77、③173、⑤362、⑥250、⑦265、⑧168)
- (5) 少康 (①96、②77、③173、⑤363、⑥251、⑦265、⑧170)

○経徳讃嘆、『無量寿経』③ (①97、②77、③175、⑤365、⑥253、⑦266、⑧185)

1. 経の目的

釈尊が教を説くのは全て衆生済度のためであり、機根が区々なので経も無量となった。

この『無量寿経』は、往生浄土を目的とし、衆生往生の法をお説きになった。

阿弥陀仏の修因感果や極楽浄土の二報莊嚴を説くのも、衆生に欣求の心を発させるためだ。

善導に基づいて解釈すると、この経はひとえに専修念仏を説いて衆生往生の業としている。

2. 阿弥陀仏の本願 (『選択集』三章に相当)

(1) 発願

第十八願文「説我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺。」

法蔵菩薩は衆生の往生行を選ぶ際に、全く余行を立てず、ただ念仏の一行をお立てになった。

よって同本異訳の『大阿弥陀経』には、「彼の仏の願は、選択して立て給う」と記される。

仏が定め置かれたことなのだから、我々が今更、往生の行について思案すべきではない。

世自在王仏も、それらの願を認めて「決定して無上正覺を成ずべし」と授記している。

(2) 願成就

法蔵菩薩は兆歳永劫の難行苦行により成仏なされたので、誓願の一行を疑ってはならない。

善導『往生礼讃』「…彼仏今現在世成仏、当知本是誓重願不虛、衆生称念必得往生。」

自力で往生を求めらるなら、仏心に適うか心配になるが、念仏はただ他力による往生である。

十声一声の称名で必ず往生できればこそ、「願を成就し成仏した」という道理が成り立つ。

願成就文「…聞其名号、信心歡喜、乃至一念、至心廻向、願生彼国、則得往生、住不退転。」

願力で莊嚴されている浄土については疑わずに、念仏往生の願のみを疑うのはおかしい。

極楽浄土がもし浄土であるならば、念仏往生もまた決定往生である。

3. 三輩段（『選択集』四章に相当、①99、②79、③177、⑤367、⑥256、⑦267、⑧196）

(1) 三輩の説明

往生の業因は念仏の一行に定まるが、行者の機根に随って上・中・下がある。

- ① 上輩…家や欲を捨てて沙門となり、菩提心を発して、一向に専ら無量寿仏を念じる。
- ② 中輩…沙門にはならないが功德を修し、菩提心を発して、一向に専ら無量寿仏を念じる。
- ③ 下輩…功德を修することは出来ないが、菩提心を発して、乃至十念、無量寿仏を念じる。

(2) 解釈、三輩ともに念仏往生を本意とする。

① 善導に基づく解釈

この三輩の文中に菩提心などの他の行も挙げているが、前述の仏の本願に照らし合わせると、その本意は、衆生に一向に専ら無量寿仏を念じさせるところにある。

『観念法門』「…一切衆生、根性不同、有上中下。随其根性、仏皆勸専念無量寿仏名…」

この釈の意味するところは、三輩ともに念仏往生である。

② 「一向」の語義

「一向」は、他を捨てるという言葉である。例えば、天竺には三種の寺がある。

- A 一向大乘寺…小乗を学ぶことがない。
- B 一向小乗寺…大乘を学ぶことがない。
- C 大小兼行寺…大小乗をともに兼学する。

二つを兼ねている寺には、「一向」の語を用いない。

この経も同じである。念仏の外に他の行を兼ねるならば、「一向」とは言えない。

「一向」というのは、諸行を捨てることだと知るべきである。

③ 三輩に他の行を説く理由…三義がある。

- A 諸行を捨て念仏に帰依させるために、余行をも説き、念仏にだけ「一向」の語を置く。
- B 念仏を助けるために、諸善を説く。
- C 念仏・諸行にそれぞれ三品の区別があることを同時に示すために諸行を説く。

初めの義を「正」とする。後の二つは「傍」の義である。

4. 流通

(1) 無上功德の文

（『選択集』五章に相当、①一、②79、③一、⑤371、⑥258、⑦267、⑧204）

「…其有得聞、彼仏名号、歡喜踊躍、乃至一念、当知此人、為得大利、即是具足、無上功德。」

他の善を讃えず、ただ念仏の一善を挙げて、無上の功德と讃嘆し、未来に流通している。

「大利」は「小利」に対する。また「無上」はこれに勝る功德が無いという意味である。

「一念」を指して大利・無上と言う。まして二念から十念、百念から万念は言うまでもない。この文により、他の行と念仏とを対比して理解すると、以下のようになる。

①念仏…大利、無上

②他の行…少利、有上

往生を願う人が、どうして無上大利の念仏を捨てて、有上小利の他の行に固執しようか。

(2) 特留此経の文

(『選択集』六章に相当、①100、②80、③177、⑤372、⑥259、⑦267、⑧208)

「当来之世、経道滅尽、我以慈悲哀愍、特留此経、止住百歳。…」

善導『往生礼讃』「万年三宝滅、此経住百年、尔時間一念、皆当得生。」

① 三時説

A 正法…教・行・証が共に具わる一千年。

B 像法…教・行はあるが、証のない一千年。

C 末法…教のみあって、行・証のない一万年。

末法の後は、如来の遺教もみな失われ、住持の三宝も悉く滅ぶ。

だが、この『無量寿経』のみが百年残り、衆生を済度する。

② 諸経が悉く滅した時に、この『無量寿経』のみが止まるのはなぜか。

阿弥陀仏の機縁がこの娑婆の衆生と深いので、釈尊もその本願をお留めになるのだろう。

③ この文に関する四義

A 聖道門の得脱は機縁が浅く、浄土往生の機縁は深い。

B 十方浄土は機縁浅く、西方浄土は機縁が深い。

C 兜率の上生は機縁浅く、極楽の往生は機縁が深い。

D 諸行の往生は機縁が浅く、念仏往生は機縁が深い。

この内の第四義、第十八願の念仏往生のみ止まるという義が正しい説である。

④ 念仏の留め置き

実際には『無量寿経』の経巻は失われ、ただ念仏の一門が百年間留まると推測される。

秦の始皇帝は焚書を行ったが、『毛詩』だけは人々が暗記し誦んじたので残ったという。

この「特留此経」も、「南無阿弥陀仏」が人の口に留まり、百年聞き伝わるのだろう。

「経」とはまた所説の法のことを言い、この経はただ念仏の一法のみを説いている。

善導「尔の時に聞いて一念せんも、皆当に彼に生ずることを得べし。」

これは秘蔵の義であり、安易に口にしてはならない。

5. まとめ

(『選択集』十六章八種選択と関連、①101、②81、③181、⑤379、⑥262、⑦268、⑧219)

『無量寿経』には念仏往生を説く文が七箇所あり、合わせると三種になる。

- (1) 本願…阿弥陀仏による。
 - ① 発願の文
 - ② 願成就の文
- (2) 三輩…釈迦の自説、阿弥陀仏の本願に順じてお説きになった。
 - ③ 上輩の「一向専念」の文
 - ④ 中輩の「一向専念」の文
 - ⑤ 下輩の「一向専意」の文…二箇所ある（「乃至十念」「乃至一念」）。
- (3) 流通…釈迦の自説、阿弥陀仏の本願に順じてお説きになった。
 - ⑥ 無上功德の文
 - ⑦ 特留此経の文

念仏往生ということは、本願を根本とする。

結局、この経は初めから終わりまで、弥陀の本願を説いていると理解すべきである。

六七日 阿弥陀仏、『観無量寿経』

○**仏徳讃歎、名号の功德** (①103、②一、③181、⑤381、⑥264、⑦269、⑧235)

同じことを繰り返し讃嘆しても功德は増すので、やはり名号の功德を説く。

1. 相好の功德…仏の六根も凡夫の六根も同じものだが、仏の六根は勝れ凡夫の六根は劣る。
2. 名号の功德

(1) 別号

「薬師瑠璃光」「阿閼」「釈迦牟尼」などが別号である。

「阿弥陀」を翻訳すると「無量寿」「無量光」だが、それらは以前に説明したので省略する。

(2) 通号

①「仏」

一切諸仏がみなこの名を具えており、一仏たりとも変わることはない。

詳しくいうと「仏陀」であり、翻訳すると「覚者」と言う。

「覚者」に三つの意味がある。

A「自覚」…凡夫と異なる。阿弥陀仏の場合は、極楽世界の人天と異なる。

B「覚他」…二乗と異なる。阿弥陀仏の場合は、極楽世界の声聞と異なる。

C「覚行円満」…菩薩と異なる。阿弥陀仏の場合は、極楽世界の菩薩と異なる。

① 如来の十号

世界の始まりには仏を表す名がなかったが、聖人たちが相談して名を付けた。

初めは十億万の名があったが、釈迦の時代には十号に集約された。

A「如来」…如実の法に乗じて来るからである。

B「天人師」…人・天を例に挙げているが、実際には六道・四生に通じる。

C「世尊」…十方世界に対してではなく、一つの世界について名付ける。

一つの世界・天下に、仏・転輪聖王が二人同時に出現することはない。

二仏が並び出るとする議論もあるが、本来は大小乗ともに認めない。

だから浄瑠璃浄土には薬師仏、極楽浄土には阿弥陀仏がおられるだけである。

その他の十方の仏国土も同様である。

(3) 名号の功德の所在 (①105、②一、③183、⑤384・385、⑥266、⑦270、⑧243)

『往生要集』「諸仏の色身・威相・種姓・戒・定・智恵…諸仏法を具すること悉く皆同等なり。是の故に名づけて三藐三仏と為し、名づけて多陀阿伽度と為し、名づけて佛陀と為す。…」

『西方要決』「諸仏願行、成此果名、但能念号、具包衆徳、故成大善。」

通号の功德が大善となるのである。

永観律師の『往生十因』は、別号の功德が大善だと解釈しているが、それは間違いである。

「阿弥陀」という別号が貴いのも、彼の仏の名号だからである。

○経徳讃嘆、『観経』③(①107、②82、③185、⑤386・387、⑥267、⑦270、⑧257)

1. 教相判釈、聖道・浄土二門判 (『選択集』一章に相当)

大意を理解したいならば、必ず教相を知るべきである。

なぜなら、教相を判断しなければ、法門の浅深の区別が明らかにならないからである。

(1) 諸宗の立教開宗

法相宗は三時教、三論宗は二蔵教、華嚴宗は五教、天台宗は四教を立てる。

(2) 浄土宗の教相判釈

① 道綽禪師が『安楽集』で、聖道・浄土の二教を立てる。

A 聖道門…三乗・一乗の得道であり、この娑婆世界において断惑開悟する道である。

a 惣じて分かつ…大乘・小乗の聖道

b 別して分かつ…四乗の聖道、声聞乗・縁覚乗・菩薩乗・仏乗

B 浄土門…まずは娑婆を出て、安楽不退の国で自然と仏道を進め、悟ろうとする道。

② この二門を立てることは、道綽一師のみではない。

A 曇鸞『往生論註』

『十住毘婆娑論』を引用。「難行道は陸地より歩行するが如く、易行道は船に乗るが如し。」

天台智顛の『十疑論』や迦才の『浄土論』も同じ文を引用している。

「難行道」とは聖道門、「易行道」とは浄土門のことである。

B 慈恩大師『西方要決』

「親り聖化に逢ふものは道三乗を悟り、福薄く因疎なるをば勸めて浄土に帰せしむ。」

「三乗」とは聖道門、「浄土」とは浄土門のことである。

(3) 聖道門の諸宗 (①108、②82、③187、⑤390、⑥269、⑦271、⑧263)

浄土門の経論のみならず、全ての経や諸宗の章疏が、この二門に収まる。

① 仏乗の聖道…即身成仏・即心是仏

A天台宗…正しくは仏乗の聖道を明かし、傍らに往生浄土を明かす。「即往安楽」の文。

B華嚴宗…天台宗と同じ（傍らに往生浄土を明かす）。

「聖道を修するは浄土に生るべきこと得難し」「願我臨欲命終時…」と云う。

C達磨宗…経論によって教えを立てず、「前仏後仏以心、不立文字」と云う。

偈文や揚眉動目によって心得るのであり、師から教えを受けない。

「即身即仏」とさとするのであり、全く往生浄土を取り沙汰しない。

D真言宗…「父母所生身速証大覚位」とあるように、即身に大日如来の位を得る。

胎蔵の三部・金剛の五部があるが、浄土については説かない。

『菩提心論』に「上根上智の人の為に此の法を説く」とあるように難しい。

韻が高過ぎると唱和する者は少なく、強い弓でも引けない者には意味がない。

機根が及ばない者にとっては、言葉のみあって内実が伴わないことになる。

② 菩薩乗の聖道門…歴劫成仏

A三論宗…嘉祥大師は『観経』などの註釈書を造ったが、浄土を本意としなかった。

智光・頼光や永観は、本宗を捨てて浄土門に入った。

B法相宗…慈恩大師は『西方要決』で往生浄土を勧めたが、自身は兜率天に上生した。

③ 声聞乗・縁覚乗の聖道門

俱舎宗や成実宗、律宗などは、声聞・縁覚の得道を説き、全く浄土は説かない。

(4) 『観経』と浄土門

『選択集』十二章に関連、①111、②83、③191、⑤390・392、⑥272、⑦271、⑧274)

この経は往生浄土の教であり、即身頓悟の旨も歴劫迂廻の行も説かない。

娑婆の外に極楽があり、我が身の外に阿弥陀仏がおられると説き、此の娑婆世界を厭い、彼の極楽国に生れて、無生忍を得ようと願うべきだということを明かすのである。

善導『観経疏』玄義分「定散等しく廻向して、速やかに無生の身を証せん。」

この『観経』は、遍く往生の行業について説く。

まず定散二善を総合的に全ての機根に説き、次に念仏一行を個別的に未来の人々に伝えた。

『観経』「仏告阿難汝好持是語」

善導「…汝好持是語より已下は、正しく弥陀の名号を付属し退代に流通することを明かす。」

この経の意図によって、今、聖道を捨てて念仏に入るのである。

2. 専雑二修 (『選択集』二章と重なる)

往生浄土について沢山の行があるため、善導は専雑二修を立てて、諸行の勝劣得失を判じる。

(1) 正雑二行 (①一、②83、③一、⑤394、⑥273、⑦271、⑧278)

『観経疏』就行立信「然るに行に二種有り。一には正行、二には雑行。」

- ① 専らその正行を修するのを、専修の行者と言う。
- ② 正行を修せずに雑行を修するのを、雑修の者と言う。

(2) 五番相對

- ① 親疎對…正行を修するのは阿弥陀仏に親しく、雑行を修するのは阿弥陀仏に疎い。

『観経疏』「…彼此の三業、相捨離せず。故に親縁と名づく。」

- ② 遠近對…正行は阿弥陀仏に近づき、雑行は阿弥陀仏より遠ざかる。

『観経疏』「…仏即ち念に応じて現に目前に在す。故に近縁と名づく。」

普通「親近」と言えば一つの事柄に思われるが、善導は別々に解釈している。

- ④ 有間無間對…正行を修する時には、阿弥陀仏について憶念が無間である。

『観経疏』「憶念断へざれば、名づけて無間とす」

雑行の者は、阿弥陀仏に心を懸けることに間が多く生じる。

『観経疏』「心常に間断す」

- ⑤ 回向不回向對…正行の者は回向しなくても、自ずから往生の業となる。

『観経疏』「今、観経の中の十声の称仏は、即ち十願十行具足有り。…」

雑行は回向しなければ往生業とならない。

『観経疏』「回向して生ずることを得べしと雖も」

- ⑥ 純雑對…正行は純極樂の行であり、他の人天、三乗、十方浄土の業因とはならない。

「雑行は純極樂の行でなく、他の人天、三乗、十方浄土の業因にもなる。

これらにより二行を判じると、西方の往生を願う人は雑行を捨て、正行を修すべきである。

(3) 専雑二修の得失 (①112、②84、③191、⑤398、⑥276、⑦273、⑧289)

① 専修

『往生礼讃』「専修の者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。」

「雑縁無くして正念を得る故に、弥陀の本願と相應する故に、釈迦の仏語に随順する故に」

② 雑修

『往生礼讃』「雑修の者は、百が一、千が五三。」

「雑縁乱動して正念を失ふ故に、仏の本願と相應せざる故に、…名利と相應するが故に、自らの往生を障るのみに非ず、他の往生の正行を障るが故に。」

「予、このごろ諸方の道俗を見聞するに…雑修の者は千中一も無し。」

善導の時代ですら雑行で往生する者はなかった。まして今の行者は思いを断つべきである。

たとえ往生できるとしても、十人の中の二人、千人の中の五三人と不確かである。

百人中の九十九人が往生すると聞いても不安になる。ましてその二人に入るのは難しい。

「百即百生」の専修を捨てて、「千中無一」の雑行に固執してはならない。

(4) 経の大意

ただ一向に念仏を修して、雑行を捨てるべきである。これが『観経』の大意である。
善導『観経疏』散善義「望仏本願、意在衆生、一向専称、弥陀仏名」
返す返すも、本願を仰いで念仏すべきである。

(さいとう むこう 嘱託研究員、東海学園大学共生文化研究所講師)